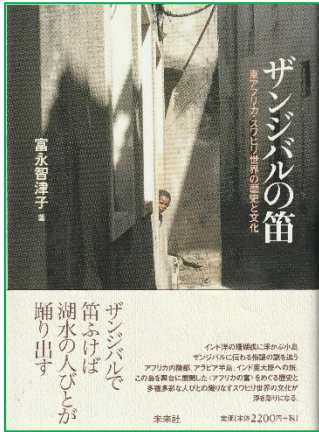
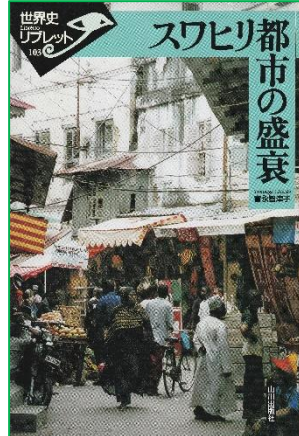


はぎの会本棚 2020・秋号

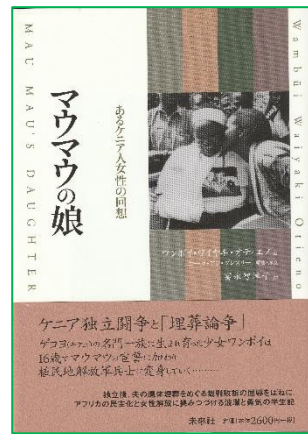
東アフリカ現代史、特にスワヒリ世界の歴史と文化の研究をご研究され、大学教授として教鞭をとられた 富永智津子さん（国院卒）より、「紹介文」をいただきました。



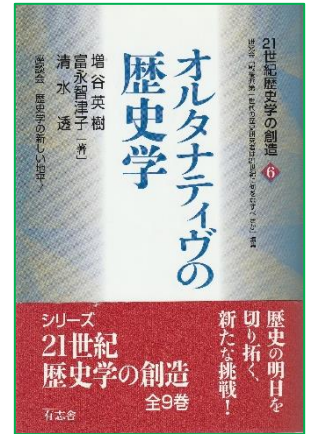
富永智津子 著
未来社



富永智津子 著
山川出版社



ワンボイ・ワイヤキ・
オディエノ 著
富永智津子 訳
未来社



富永智津子 他2名著
有志舎

アフリカ研究に寄せて

— 「女性婚」 にみるアフリカ社会のジェンダー操作

アフリカは日本の約 80 倍の面積に 10 億に近い人口を擁する大陸です。2000 とも 3000 とも言われる民族集団が西欧列強によって恣意的に分割され、現在 56 か国（西サハラとソマリランドを含む）に囲い込まれています。その結果として、ジェンダー関係を実質的に規定し続けているのは国家が制定している「近代法」というよりは、民族集団それぞれが祖先から受け継いできた慣習法や民族宗教が優先されている場合が多い。

そうしたアフリカ社会との長い付き合いの中で驚かされることがいくつもありました。そのひとつが多様な婚姻制度です。一夫一婦、一夫多妻、一妻多夫、亡霊婚、レヴィレート、ソロレート、そして「女性婚」です。今では消滅してしまった制度もありますが、その多くは、女性の再生産能力を最大限に引き出し、父系社会を強化する目的で編み出された形態なのです。例外は「女性婚」。これは、女性がジェンダーを移行して「夫」となり、妻をめとる婚姻制度です。女性が「婚姻」という社会制度を自分のために利用して生活圏の確保を可能にするアフリカ固有の制度です。ナイジェリア、スーダン、南部アフリカ、ケニアなどで事例が報告されています。ここではケニアのギキュとキプシギスというふたつの民族集団の事例を紹介します。（次ページに続く→）

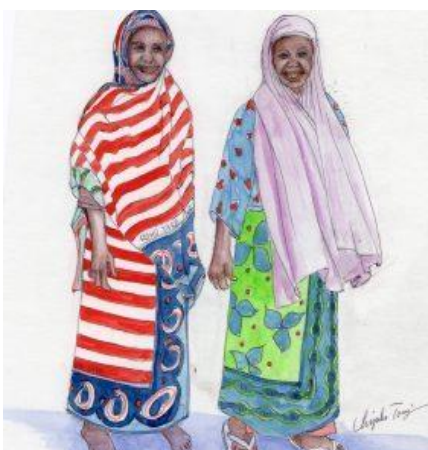
(前ページより続き) ギクユでは、「夫」になることを社会的に認められた女性が、長老会(ギアマ)を通して、あるいは自ら花嫁を募集します。候補者が現れて合意が成立すると、友人や親族が贈り物を交換し、両家の長老による儀礼が行われます。そのプロセスは、ほぼ通常の慣習婚と同じです。男性と結婚している女性が、女性を「妻」として迎えることもあります。その目的については、不妊症とわかったため「妻」をめとり子どもを産んでもらうため、ひとりでの寂しさを和らげるため、家父長的権威による支配から逃れるため、男性とは一緒に暮らしたくないが家族はほしいから、といった多様な回答が当事者から寄せられています。

次は、牛牧民キプシギス社会の事例です。この社会で女性婚が増加したのは、植民地下での「英国法」の導入によって慣習法のもとでは困難だった離婚が容易になり、離婚した女性が女性婚を選択するようになったからだそうです。横暴な夫に苦しめられた経験から男性との結婚は望まない・・・しかし男性にしか所有権のない土地を入手して自立したい・・・子どもも欲しい・・・そのための唯一の方法が、「夫」として社会的に認知される女性婚なのだったのです。

こうして見てくると、女性婚は、女性同士の結婚ではありますが、「夫」となる女性がジェンダーを移行して「男性」として社会的に認知されるというプロセスを介入させ、なるべく通常の結婚形態に近づけようとする力学が作用していることがわかります。しかし、実質的には、いわゆる「同性婚」や「代理出産」と近似しているといつてよいと思います。アフリカには、こうしたジェンダー操作によって共同体的規制を迂回し、土地所有権の問題や、われわれが現在直面している女性の不妊や同性婚の問題を解決してきた民族集団が現在も存在しているのです。

私が驚かされたのは、「女性婚」そのものというより、西欧がジェンダーを「発見」するはるか昔から、生物学的な性を含めて「性は文化的・社会的に構築され得るもの」と捉え、それを実践していた民族集団がアフリカに存在していたことです。

キリスト教会などによって「不道德」のレッテルを張られ、存亡が危ぶまれている女性婚ですが、家父長社会の中で女性が自己主張できる貴重な選択肢を提供してきたことは疑いありません。



こうしたアフリカ社会の「知恵」に惹かれて研究をはじめ、半世紀が経ちました。私の研究生活は終わろうとしています。アフリカ社会は先人の知恵を脱ぎ捨ててきた私たちに、「もっとおおらかに、たくましく生きよ」と語りかけてくれているような気がしてなりません。そうしたメッセージを私の拙い著書の行間から読み取っていただけたら幸いです。

富永智津子